

# 取香岩

## 取香のばあの闘い

### 総括にかえて

ばあの叛乱・蜂起の意味するもの

ほとんど異口同音に、人民戦線の序章・日本におけるベトナム解放戦線という賛辞が発表された。誰かが八月三十日のばあちゃん戦争宣言、九月十六日の機動隊せん波戦、九月二十日ばあちゃん戦争の革命のレジスタンス、以降相續く敵の拠点に対する破壊戦の展開はまさに革命戦争の嚆矢を告げるにふさわしい人民の総攻撃だつた。

二月第一次強制代執行、七月二番十六番強制代執行、そして今回の第二次強制代執行と相續く敵の猛攻撃に對して三里塚農民を中心として支援の学生、労働者、農民の共同戦線による総反撃が展開されていつた。七十年代初期の日本階級闘争は、三里塚一沖繩を何如に闘い抜くかという地にその試金石があつた。これが三里塚闘争のかかえた革命的な意義であり、また悲劇的な状況でもあつた。三里塚を何とか切り抜けたならば七十年代の国内階級闘争への活路は一切見出しなかつた。三里塚を何とか切り抜けたならば、抜き差しならぬ取捨選択をせよとされた。取香のばあちゃんに對しても、地主を通じての切りくずし、飲料水・田畑に對する日常的な破壊活動という形でじわじわと悪魔の手がのびてきた。

執よりな敵のいやがらせにより五月頃、ついに病の床に伏したばあちゃんが完治するのを待たず起きあがつた時、我々ばあちゃんの言葉を始めて聞いた。『おらの身はからの身よりであつておりの身でねだれから、から同盟身預けてあるだから』我々は、かつて組織と個人の闘いで論じられた語のうちに、これ程の重みをもつて受けとらねばならなかつた。これは『を知らない。』

この時、ばあの戦闘宣言は発せられていたといつてよい。貧乏、小作として、女として差別され抑圧されてきた六十年のばあちゃんのりらみつらみは、『民主主義』国家による土地強制収用という事態に際して一挙に暴発した。そしてそれは、単に報復の論理にとどまらず、弱い者が強者に対して立ち上がり過程でどのような共同性が獲得できるのかという問題を内包していつた。三里塚闘争は、共に日本の経済成長の不均等発展の中で犠牲を強いられる人々でありつづき、土地を収奪される豪地内農民と空想組織ともなり騒音公害を通じて生活圏を奪われんとする遠地外農民といふ違つた利害をかかえた人々の共同闘争としていつた。ばあは同盟に身預けてあるだから』という言葉は、土地不平等と自らの闘いを貫き通すことで空想と土壌と共同闘争を獲得せんとする反殖力の意識の高みにまで到達したことを表づけるものだつた。逆に言えば、反対同盟の一人ひとりか、おたがいの立場の相異性からくる矛盾を極限まで追いつめ、空想と土壌といふ共通の獲得目標のための新たな共同性を獲得しないといふことだ。

労働者統一戦線、人民戦線といふことがよく言われるが、我々は、再度誰と誰が連帯して、何如なる戦線を構築するのかがという問題を考えねばならない。戦後民主主義の矛盾をかかえて、七十年代にブルジョワが意図する産業再編の中で誰が犠牲を強いられるのかという処に問題の端緒がある。戦後、一定程度の福利

### 「取香岩」編集委員会

を獲得した人々が、戦後体制の構造変化にともない既得権を剥奪される過程で種々のレジスタンス闘争が展開される。公共の福祉、結社の自由、公と私の利益が共に補償し得る戦後社会といふのが日本人に与えられた幻想だつた。日本帝国主義の、かかる幻想をふりまき、あつたは民族共同幻想の下に再度アジア侵略の野望を温めていつた。三里塚農民、新全協の下で切り捨てられていく全開農民、公害地区住民は、公の利益と個人の利益の不一致を認識した。個人の権利をあくまで主張するとき、国家権力は、土地を強制的に収用することを、国家は決して個人の利益を補償するのではなく独自資本の利益のたぐひのみあるといふことを知つた。それは人民の階級意識はめづらぬ。それは、『失うものは鉄鎖のみ』といふブルジョワリットがはつきりと響かつていつたのでは、誰がプロレタリアートか、誰が国家利益の名の下に犠牲を強いられる人々かといふことが民主主義のペルにつつまれていつた。それが今かされたといふことだ。民主主義の下に運存されていつた地域共同体が、かかる力の攻撃に抵抗する中で、一層階級化されて新たな質の共同性が形成される。部落から条件を生みだし、又学生と共同するといふ過程で現れてくるから、むしろ階級は形成されていくといふことを確認したい。我々支援が、抱えた矛盾を一手に引き取り、同志三ノ宮は自殺した。敵対力への憎悪はますますつるはかりだが、終日ふらふらと暮らす露雨を窓外に見やりながら、何ともやりきれぬ思いは強けられない。彼の死を恨んどうに正しく受けとめることとしては、決して強力にうちかつかつたとはできないだろう。我々の闘いといふものは、闘うの一人ひとり心をつくって、個人と個人の利益と闘うもの全体の利益の一致をあくまで追求するものとしてあるから、今簡単に言葉にするにはできないが、我々の総括作業は連年と闘争の中で続けられていくであろう。

ばあは代執行終了後、第二期工区区域に相当する東峰地区に仮小屋を建てて生活していつたが、便所、風呂なども整わず、住居としてはまだ十分でない。今、ばあはの家を作らうといふ同盟、支援として全国の人々の一体となつた運動が展開されようといふ。ばあは取香の闘いが終つたからといつて、これで自分の役目が終つたとは考えていない。『そろそろ手制取りをすべし』と再認自分の生活をかかえて闘争に決起せよといふ。誰かに取香の死守戦を闘い抜くことによつて、ばあは客観的に責任を果した。しかし六年間の三里塚闘争は、はるかに決定的な飛躍をもたらしつた。生活をかかえて闘争を開始した三里塚闘争は、今や闘争のあるところから生きて生活の場を設定する、ばあといふ人間を造りあげた。ばあは闘いはいつまでも続く。かならずや空想と土壌の日まで、ばあは闘いは点々と場をかえながら、より高次の闘争へと発展していつた。



成田市取香町

七〇二の方

大木 上ね方

反対同盟の皆さん、
取香のばあちゃんの家を破壊して、ばあちゃんの生活を苦しめようとしていま...

六月代執行にむけ取香のばあちゃんの後継ごり！



取香のばあちゃん、

「ばあちゃん、はこれ一月、朝早くから夕方遅くまで...

現場労働者は、まず筋道をたてて話をする。それでもわからない時は...



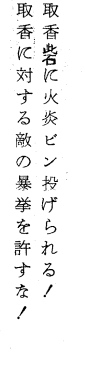
反対同盟の皆さん、

四月三日夜七時半頃、我々の取香団結小隊すなわち、大木上ね方の住家に対して、火炎ビン攻撃がかけられたのである。

条件派の悪徳地主の名義だ。ばあちゃんのものといえど、一三三三三のポロポロ小屋(住家)を、電灯はつく、いまは二〇三〇年暮らした。...

ばあちゃん割れ、取香 一週間の工事中止を闘い取る

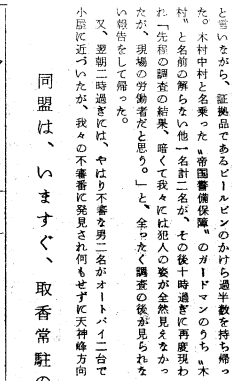
現場労働者は、まず筋道をたてて話をする。それでもわからない時は...



反対同盟の皆さん、

攻撃内容は、悪徳地主が住居を焼くはガードマンと思われる。男一名が電話入り...

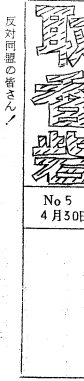
取香に火炎ビン投げられる！ 取香に対する敵の暴挙を許すな！



反対同盟の皆さん、

四月十七日の雨、取香の現場中真中にあるばあちゃんの家が水浸し...

同盟は、ますます、取香への常駐体制に入ろう！



反対同盟の皆さん、

四月十七日の雨、取香の現場中真中にあるばあちゃんの家が水浸し...

再度、敵はばあちゃんの家を攻撃す！ 公団・京成に断固たる怒りの反撃を！

二度、敵はばあちゃんの家を攻撃す！ 公団・京成に断固たる怒りの反撃を！

取香への敵の攻撃を許すな！

工事部長の田田は、新聞記者にこんなことを言っている。『工事は急いでいるので、少しづつの犠牲は、やむを得ない。』...

再度、敵はばあちゃんの家を攻撃す！ 公団・京成に断固たる怒りの反撃を！

再度、敵はばあちゃんの家を攻撃す！ 公団・京成に断固たる怒りの反撃を！

再度、敵はばあちゃんの家を攻撃す！ 公団・京成に断固たる怒りの反撃を！



